



Title	V. 多文化交流科目「クリティカル・シンキング」
Author(s)	小林, 由子
Description	【特集】留学生と日本人学生がともに日本語で学ぶ「多文化交流科目」の創設
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 18, 61-68
Issue Date	2014-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59649
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISCHU18_07.pdf



V. 多文化交流科目「クリティカル・シンキング」

小 林 由 子

1. はじめに

「クリティカル・シンキング」は、2012年度に学内の上級日本語学習者を主たる対象とする「アカデミック日本語」として開講された。2013年度・2014年度後期は、学内の上級日本語学習者と新渡戸カレッジの日本人学生を主たる対象とする「多文化交流科目」として開講している。

本稿では、2013年度後期に「多文化交流科目」として開講した「クリティカル・シンキング」について報告し、その意義と展望について述べる。

2. 目的と背景

「クリティカル・シンキング」の授業は、日本人学生と留学生が共に学び、言語的なスキルを習得することを意図している。実践の目的は、日本語での発表やレポート・論文作成に必要な「クリティカル・シンキング」の力を養い、論理的な思考・文章の構成、資料の分析、適切な情報の活用、客観的な日本語の記述ができるようになることである。

「クリティカル・シンキング（批判的思考）」は、OECDによるAHELO（Assessment of Higher Education Learning Outcomes）におけるジェネリックスキル（汎用的技能）の一つである（子安 2011）。その源流は古代ギリシャに遡るといわれ、アプローチも様々であるが、技能目標に基づいて行われる論理的思考であり、意識的な内省を伴う思考であることが共通している（楠見 2011）。批判的思考には、論理的なアプローチや心理学的アプローチ、さらに、それらをビジネスや文章作成での問題解決に応用したアプローチなどがあるが、本実践は、論理的なアプローチを部分的に参照はしているが、主に心理学的なアプローチを採用している。

背景としては、筆者が学内の留学生を対象とした「一般日本語」の「上級文章表現」の授業でレポート・論文作成について授業を行っていた際、問題が日本語力ではなく、読み手との前提の不共有、論理の飛躍、目的（問い）と結論（答え）の乖離などにあったことが大きい。これは、言語的というより、むしろメタ認知の欠如という心理的な要因によるもので、留学生のみならず日本人学生にも見られる。（小林 2007）。

3. 実施の概要

3.1 実施時期

多文化交流科目としての「クリティカル・シンキング」は、2013年度・2014年度とも後期のみの開講である。開講日時は火曜日の5限（16：30～18：00）であった。

3.2 受講者

2013年度後期の受講者の概要は以下の通りである。

日本人学生 11名（すべて学部1年生、うち文学部3名 綜合理系2名 総合文系・経済学部・法学部・理学部・歯学部・水産学部各1名、新渡戸カレッジ生8名）

留学生 8名（修士1名 研究生5名 日本語日本文化研修生・特別聴講学生各1名、うち中国5名 アメリカ・ロシア・アゼルバイジャン各1名）。

ただし、留学生で修了したのは2名（いずれも研究生、中国）のみで、4名がキャンセル、1名が無断キャンセルし、1名が不合格となった。日本人学生の受講者では修了できなかった者はなかった。

3.3 授業および評価の方法

授業は、まず、アイスブレイキングとお互いを知ることから始め、その過程で前提を共有することを意図した。次に、暗黙の前提、論理の飛躍や資料の不適切な引用などを含むテキストの分析をグループで行い、なぜ不適切かについて議論した。そして、学習者それぞれが選んだテーマについてレポートを作成することを最終目標とし、前提・問いと答え・論拠を意識化しながら、グループでそれぞれのアイディアを共有したうえでレポートを作成した。

特に心がけたのは以下の三点である。

- ・ 「きちんと頭を使って考える」ことができるようなスキルを身につけられるようにする
- ・ 最終的に、学生がまとめたプロダクトが産出できるようにする
- ・ 「クリティカル」なメタ認知的知識を養うため、後半、授業冒頭に何を学んできたかを振り返る時間をとり、最終回で「何を学んだか」

を「教訓帰納（市川1993）」的な形で振り返るようにした

評価は、授業で課す課題30%（宿題として授業後毎週提出）、授業中のパフォーマンス（準備も含む）30%、期末レポート（発表を含む）40%をもって行った。

3.4 授業のスケジュール

授業のスケジュールは以下の通りである。

- | | | |
|------|--------|---|
| 第1回 | 10月1日 | ガイダンス1 アイスブレイキング1
（日本人新渡戸カレッジ学生のみ） |
| 第2回 | 10月8日 | ガイダンス2 アイスブレイキング2
（日本人非新渡戸カレッジ生・留学生）
「前提」を考える（イントロダクション） |
| 第3回 | 10月15日 | 「読み手」を考える
「クリティカル・シンキング」とは |
| 第4回 | 10月22日 | 前提を意識する
「原因帰属」「認知バイアス」 |
| 第5回 | 10月29日 | 資料を批判的に読む1
結論と構成を意識して要約する |
| 第6回 | 11月5日 | 資料を批判的に読む2
問いと結論の結びつき・論証のしかた・段落の構造
に注目する |
| 第7回 | 11月12日 | 資料を使って考える・書く
引用のしかた |
| 第8回 | 11月19日 | 因果関係を考える
演繹的推論と帰納的推論
誤謬の理由 |
| 第9回 | 11月26日 | 客観的に書く（文体編） |
| 第10回 | 12月3日 | 結論を考える
その文章の結論を導くような「問い」を考える |
| 第11回 | 12月10日 | 議論の型
「問い」の類型
最終レポートのテーマについて問いの形で考える |
| 第12回 | 12月17日 | 考えをまとめる |

- ファシリテーション・グラフィック
自分のレポートテーマについてグループのメンバーに話す
- 第13回 1月7日 論拠を厚くする
段落の構成
最終レポートのアウトラインを作成する
- 第14回 1月21日 つながりを考えながらテーマを絞る
接続詞
「問い」の絞り方
- 第15回 1月28日 自分の考えをまとめて話す
グループの中で自分のテーマについて発表（その議論に基づき最終レポートを作成する）
- 第16回 2月4日 まとめ
「クリティカル・シンキング」とは何か、振り返る
参考文献紹介

4. 結果と考察

4.1 受講者からのアンケート結果

授業が全て終了した後、受講者に対しアンケートを行った。その結果、以下のような自由記述が得られた（原文ママ）。「留学生」と記した以外は日本人学生の回答である。

- ・ 大学院の入学試験に日本語論述の試験がありますが、今回の授業を通じて、論文の書き方がより一層はつきり分かるような気がします。試験に役に立てると思います。（留学生）
- ・ 論文を書くときは文と文との関係を意識しながら書くのが大事なことである。レポートのテーマを絞るのが難しいことだと思うが、文章の構造を意識する絞る仕方などを掌握すれば、易しくなる。今学期の授業で学んだクリティカル的に考えることは今後非常に役に立つと思う。（留学生）
- ・ 一応、2000字を越し、レポートらしく長文になったかと思います。出来は書きやすいテーマに比べたら良くないかもしれませんが…。しかし、この先ずっと書きやすいテーマばかりを書いていくとも限りません。その意味で、今回このテーマでレポートを書くことができたのは大きな

収穫でした。そして、書きやすいテーマ・書きにくいテーマという概念があることもこの授業で実感として初めてわかりました。

- ・ 今後の課題は、人前での発表で、より伝えやすくすることです。今まで、討論することもままならなかった私ですが、回数を重ねるごとに発言も増え、参加できるようになってきたと思います。発表をする機会はまだまだありません。これから練習し、だんだんと改善していきたいと思いました。先生の最終講義での、制限時間を意識する・人はそんなに自分のことを見ていない等のアドバイスはとても参考になりました。ありがとうございます。
- ・ 今回の授業は発表が主な内容だったが、発表しているうちに気付いたことや、その後のコメントで指摘された部分があってレポートが幾らか書きやすくなったので良かったです。とは言うものの、いざ実際に書いてみると意外に論の進め方や引用の方法などでわからなくなることが多くて、これで正しいのかおっかなびっくりで書きました。最初はどんなものになるかわからない授業でしたが、回数を進める毎に得るものや楽しが増えて、非常に充実した授業になりました。ここで学んだことをこれからの学生生活のみならず様々な場面で利用できたらいいと思っています。ありがとうございました。
- ・ 今回の授業では個々の最終レポートに関する発表とそれに対する意見交換を行いました。先々週とはほぼ同じテーマのまま進んでいる人もテーマを変えて調査している人もいましたが、様々な観点を知ることができて良かったです。完成したみんなのレポートをぜひ読んでみたいと思いました。また、話し合いの中で問と結論との一致、どこまで論拠として事実を書けばよいかなど改めて難しさを実感しました。
- ・ この授業を通して主に学んだことは大学でのレポートの書き方についてです。最初は参考文献を使用する意義さえわからず、レポートを書く際に参考文献を使用したことは一度もありませんでした。そのため、参考文献の探し方や使い方、引用の仕方、そして参考文献の示し方も知りませんでした。毎回の授業でレポートの書き方を習っていくうちに徐々にレポートの書き方がわかるようになり、レポートを書くことやレポートを書くために考えることが楽しくなっていました。今学期末はこの授業を除いて5個レポート課題があり、個人的にかなり心配していたのですが、無事にすべて書き上げることができ、とても自信ができました。

多くのレポートを書き上げることができたのは、この授業のおかげです。
ありがとうございました。

- ・ この最終レポートを書き上げるために読んだ論文、考えたことが、自分が望む大学生生活の像を具体的に整理して、自分の中に照らし出してくれたように思います。
- ・ 今まで16回の授業を通して実に実用的なそれでいてなかなか学ぶ場のない多くのことを教えていただきました。本当に感謝しています。どうもありがとうございました。
- ・ 最終講義ではクリティカルシンキング全体の総括をしました。講義の最初でもクリティカルシンキングとは何か、という問いはあったと思うのですが、全講義を終えてみてその時よりも深い理解が得られたと思っています。今期自分が選択した講義はたまたまレポートや小論文が多かったのですが、この講義を通して学んだことをすぐに実践できたのが非常に有意義でした。今、前期に自分が書いたレポートなどを見直してみると、なかなか改善点があるのが良く分かります。これからの大学生活、学問的な頭の使い方だけでなく、日常において例えばニュースや新聞から情報を得る、人の話を聞く際など、クリティカルシンキングは広く役立つものだと思います。また、こうした情報を受信するだけでなく、発信する際にもより効果的に相手に伝えるという意識をもってこの考え方を活用していきたいです。ただ、先生もおっしゃっていたように、まだまだ入門程度の理解だと思うので、春休みなどを通じて参考文献のいくつかにあたってみたいと思います。

4.2 日本人学生と留学生のニーズの違い

授業後の自由記述を見ると、留学生と日本人学生では視点が異なる。

留学生は、大学院の試験など「論文を書く」ための「日本語」に目が向いているのに対し、日本人学生は「レポートを書くこと」そのものや考え方に目が向いている。

筆者は、全学教育科目「一般教育演習」において「レポートのための基礎日本語」という授業を行っていたが（詳細は小林（2007）を参照）、23名の定員に対し例年100名以上の応募者があり、その多くは「大学のレポートへの不安」「レポートの書き方の訓練を受けていないこと」を受講の動機として挙げていた。「クリティカル・シンキング」の授業においても、日本人

学生には同様の不安があり、その不安をある程度解決することに貢献できたのではないと思われる。また、グループワークが問題解決に貢献していることも伺われた。特に、当初伸び悩んでいるように見えた学生が、途中から大きく伸びたことは収穫であった。

一方、最後まで残った留学生2名は、いずれも中国語を母語とする研究生だったが、大学院入試を控えていることもあり、「試験・論文のための日本語」を学びたいという姿勢が強かった。

実は、中国語を母語とする留学生と、中国語を母語としないアメリカ・アゼルバイジャン・ロシアの留学生には大きな違いがあった。中国語を母語としない留学生は「クリティカル・シンキング」の訓練を既にある程度受けていたのに対し、中国語を母語とする留学生は「クリティカル・シンキング」についてはほとんど知らない状態で、「授業では日本語を学ぶ」という学習観が強かったように思われる。結果的に非中国語母語話者および中国語母語話者数名は「学業が大変である」「大学院試験準備」「日本語がむずかしい」という理由で授業をキャンセルしたが、このような学習観の違いや日本語力の差に対してどのように対応していくかは、今後の大きな課題である。

5. 今後の課題

2013年度の授業において、最も大きな問題は、留学生の減少であった。その理由として考えられるのは、上述したように、特に中国語を母語とする留学生の主な動機が「日本語学習」であったこと、大学院受験を控えており自らが考える「日本語学習」と合致しないため受験を優先したこと、抽象的な思考を必要とし高度な日本語能力を要求されたため、日本語に困難を感じたこと、などである。

今後は、このような学習観の違いにどう対応し「日本語ではなく考え方を学ぶ」ことを方向づけていくか、学習者の日本語力がやや劣る場合にどうすべきかを考えていかなければならない。

また、「課題の負担の大きさ」を訴える留学生もおり、作業量についても検討する必要がある。

さらに、留学生と日本人学生が共に学ぶ場合、「批判的に考える」ためにどのような題材を用いるのが適切かも課題である。文化的な違いや前提の異なり・認知的なバイアスが見えやすい題材を今後も探求する必要がある。

「クリティカル・シンキング」の能力を高めることは、すなわち「メタ認知」能力を高めることであり、グループワークはその有効な手段であるが、グループワークの方法を改良していくことも課題のひとつであろう。

6. おわりに

2014年度後期は、2013年度の実践結果を踏まえてシラバスや題材を大幅に変更し「クリティカル・シンキング」の授業を行っているが、本稿執筆の時点では、まだ完了していない。また、2015年度も引き続き同様の多文化交流科目を開講する予定である。

今後も、さらに実践の精査・蓄積を行っていきたい。

参考文献

- 市川伸一 (1993) 『学習を支える認知カウンセリングー心理学と教育の新たな接点』 ブレーン出版
- 小林由子 (2007) 「留学生向け日本語授業への日本人学生への応用 ー一般教育演習「レポートゼミ」での実践ー」 『高等教育ジャーナルー高等教育と生涯学習ー』 Vol.15, 46-53
- 子安増生 (2011) 「批判的思考の知的側面」 楠見孝・子安増生・道田泰司 (編) 『批判的思考力を育む』 有斐閣 25-44
- 楠見孝 (2011) 「批判的思考とは」 楠見孝・子安増生・道田泰司 (編) 『批判的思考力を育む』 有斐閣 2-24

こばやし よしこ (留学生センター教授)